理論地理学ノート，No.6，51～58

越後毒消し売りの行商活動について

櫛　谷　圭　司

1　はじめに

地理学で地域間関係について論じようとする場合，マクロなデータをもとに，ある時間断面について見ることが多い．しかしそのような抽象的レベルではなく，具体的な人間のスケールでこの言葉の意味するところを考えてみると，それは「ある地域に他者が入り込んでいく過程」と言い換えられるのではないか．つまり，ある文化を背負った人（個人あるいは集団）が別の文化をもつ地域に入り込むと，そこで2つの別々の文化が接触することになり，互いに何らかの影響を与え合う．そうしたときにはじめて，2つの地域が関係を持ち始めた，と言ってよいのではないだろうか．

通信手段の発達した現代社会では，このことは直接の人的交流だけでなく，実態をつかみにくい情報の地域間流動といったものによっても，日々起こっているだろう．しかしもともとは，人が直接自分の見知らぬ土地へ出かけていって，自分の持っているものや情報をその土地の人々と交換したことに始まる．

日本では，地域間の人的交流が特定チャンネルに限定されていた長い時代を経て，明治以降ようやく一般の人の長距離移動が制度面で自由になった．また，全国各地を結ぶ鉄道が建設されていき，人々は徐々に近代的な移動手段を手にしていった．こうした結果，それまで独自性の高かった日本の諸地域の文化が接触する機会が増大し，地域間の関係は急速に深まっていった．

たとえて言えば，今日話題になっているアジア近隣諸国から日本の大都市への男女労働者の流入と似た状況が，当時の日本国内で起こったわけである．そして，現在いろいろな摩擦を経験しながらも，そのことによって徐々に日本人が庶民の日常レベルでも国際感覚を身につけつつあるのと同様のことが，当時も起こっていた思われる．

本稿で扱うのは，明治から昭和初期に見られた新潟から他県への出稼ぎ者の例である．

上の一般論とは矛盾するが，実際には近世にも特定の技術を持った出稼ぎ者集団が，国を越えて季節的な移動を行っていた．越後の杜氏や大工はこの好例である．しかし，特殊技術を持たない労働者が大量に季節移動を行うようになったのは明治以降で，農閑期に限らず農繁期にも出稼ぎに行く集団や，女性の出稼ぎ者の集団も出現した．

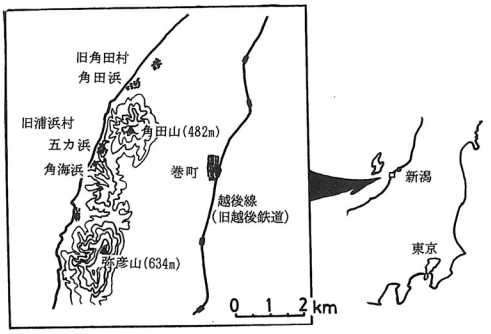
こうした人々の出稼ぎ期間が長くなり，集団の規模が大きくなっていくと，それだけ文化の接触の機会が増し，そして出稼ぎ者の出身地と出稼ぎ先との地域間関係も深まっていっただろう．出稼ぎという活動を，単に金銭的な利益を求めて行われる経済行為として見るのではなく，庶民レベルで地域間関係を深化させていった実例と見ることができるのではないか．こうした考えを基本として，以下の考察を行うことにする．

2　対象事例と問題点

前稿で筆者は，信濃川下流部の越後平野亀田郷における，戦前の湿田耕作について報告した(櫛谷,1988)．この地域の農民は，水害常襲地という悪条件下でもそれに受動的に対応するだけでなく，稲の収穫最大化のために早くも明治末から動力排水機を導入して水を管理し，品種の選択にも工夫をしていた．この事実は，戦後の大規模土地改良までこの地域では農民が一年中水の中で農作業を行っていた，という従来からの一般通念に修正を求めるものだった．

しかし，いかに土地条件が悪くても，環境改善の努力や工夫によって収穫が上がった地域はまだ良いほうである．上の例よりもさらに自然条件が劣悪なために，農業の継続が放棄された地域もあった．

ここで取り上げる新潟県西蒲原郡巻町の角海浜（かくみはま）集落（旧浦濱村角海濱）もその一つである（第1図）．新潟市の南西約25Kmのところにあるこの海岸集落は，近世には戸数250を数えたこともある．



第1図　位置図
等高線の間隔は100m

しかし，相次ぐ波欠け（マクリダシ）や山崩れ（ヤマダシ）でわずかな耕地も狭められていき，ついにそのほとんどが失われてしまった．

明治以降，この角海浜の人々が農業に代わる生業としたのは，村内で作られる民間薬，毒消しの行商である．農地を失った村にあって一家の現金収入を得るために，多くの女性が学校を出るとすぐ東京などの遠隔地で毎年長期間集団生活をし，薬売りの行商に従事したのである．この全盛期は明治末から昭和初期にかけてで，そのころには自然条件の類似した周辺の海岸集落からもたくさんの女性が従事していた．

ところでこのテーマに関しては，すでに小村弐(1963)や巻町・潟東村教育委員会(1974)などの，おもに歴史的な発達過程や集落の民俗に注目した研究報告が行われている．しかし，これらの地域史や民俗学の立場からの研究では，行商人を送り出した地域の歴史を掘り起こすことに関心の中心があり，彼女らの行商活動自体についてはあまり検討されていない．たとえば，毒消し売りの行商人たちは，どの地域でどんな人々を顧客としていたのだろうか．行商人の数や販売エリアは，社会経済的条件の変化とともにどのように推移したのだろうか．こうした点はこれまでの研究ではほとんど明らかにされなかった．

以下，3節で毒消し売り行商の概要をみた上で，4節で上の問題に関して，現在までに収集できた資料を引用しながら考えてみたい．

3　毒消し売り行商の概要

現在の農山村からの出稼ぎは農閑期に行われるのが通例だが，この毒消し売りの行商は農繁期の季節労働である．また，その収入は農家の家計の一助というよりも，多くの場合，一家の生活を，ひいては一村の経済を支えるものになっていた．佐藤元重(1959,p.58)によれば，「自然的経済的諸条件が劣悪なために，何等の副業を要求する条件の地帯に属する農産漁村に発生する型である．すなわち，農漁業経営のみに依存しての生活がきわめて困難な自然環境の被制約性によって発生し，副業製品あるいは他の商品の販売を行う季節的行商移動という形態をとる」ものであった．

小村弐(1963)は次のことを明らかにしている．すなわち，毒消し薬の生産の発祥については諸説があり，いずれも史料面の裏付けを欠いているが，角海浜の称名寺が江戸時代には毒消し薬を製造し，布教のために施薬をしていたことが確認されている．その薬が1840(天保11)年に寺の借財解決のために檀家以外にも広く領付されるようになり，1846(弘化3)年には同村の滝深庄左エ門に製造権の付与と販売権の譲渡が行われる．そして幕末ころから毒消し薬の行商が始められ，女の旅稼ぎの禁制が撤廃された明治以後，女性の参加によって飛躍的発展を見る．

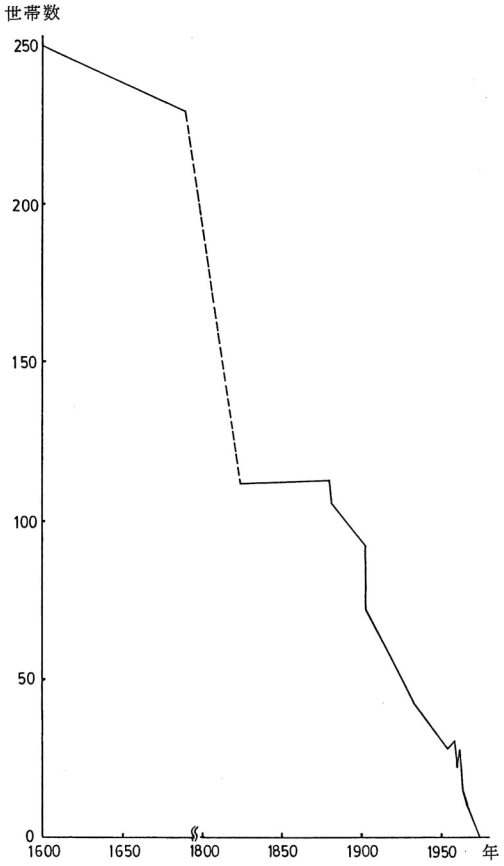
この角海浜の土地から毒消し売りの行商が始まったのは，前節のように，基本的には海岸侵食が激しく耕地が確保できないために米作を生業にできなかったからである．さらに明治以降，土木技術の発達にともない信濃川の本・支流に悪水排除のための放水路が多数建設され，それにより越後平野の広い地域では安定した水稲収穫が得られるようになったのだが，皮肉なことに角海浜では，近くの山を貫く排水路（樋曽山隧道）の建設工事で井戸が枯れ，農作物の栽培は不可能になった．

こうした環境面の悪化に沿うように，角海浜の人口は近世以降一貫して減り続けた(第2図)．明治前半にはまだ100世帯ほど残っていたが，昭和初めには半減し，戦後の高度成長期にはさらに激減した．そして，1969(昭和44)年に集落の全域が東北電力の原子力発電所用地とされ，土地買収が進められ，1974(昭和49)年ついに廃村となった．

ところで，毒消し薬が行商人によって広く販売されるようになったのは明治以降であるが，近世からこの付近の海岸集落からは，江戸・東京をはじめとする関東地方や会津地方へ大工・木挽など

の出稼ぎ者が出ていた．越後の「毒消丸」は，最初はこれらの人々によって出稼ぎ先へ伝えられた．初期の行商人はこのコミュニケーション・チャンネルを利用して薬の販路を切り開いていったようである．

この毒消し薬の行商人が明治末ころから急速に増加した背景としては，次のことが考えられる．まず，製造者から売り掛けで商品を仕入れ，客には現金で販売する形式であったため，開業するのに多額の資本を必要とせず，誰でも始められ，確実な現金収入が期待できた，という点が上げられる．次に，学校を卒業した女子が行商人の親方（近親者の場合が多い）にスカウトされて見習いとして雇用され，共同生活の中で仕事のノウハウを憶え，そして自分の顧客をつかんで独立し，やがて親方として行商人の再生産に携わる，という制度が確立されていたことが大きい．もちろん現実には，村のみんなが行商に出るから，という理由で参加した人も多かっただろう．女に生まれれば毒消しに行くのが当り前で，行かないと身体が悪いのかと気の毒に思われた，という話も現地で耳にした．こうしたことにより，毒消し売りの数が増えていったのである．



第2図　角海浜の世帯数の推移

「昭和42年5月20日調　角海浜戸数または世帯数並に人口動態調査表」（巻町大字角海浜総代）をもとに作成

毒消し売りの行商が村の主要産業として確立した明治末から大正期には，女性たちは毎年4～5月に，最寄り駅から専用列車で関東方面などに向けて旅立った．旅先では親方と数人の見習いが一緒に家を借り，そこを生活の根拠地にする．毎日早朝，独特の衣装で宿舎を出て，一軒一軒「毒消丸」などを売り歩き，夜までに宿舎に帰る．こうした日を半年間ほど続けて10月ころに帰郷する．

数年の見習い期間を経て独立した一人前の毒消し売りは，故郷で農作業を行うよりずっと高収入であったという．彼女らは一家の大黒柱であり，毒消し売りであることを誇りにしていた．毒消しの村は彼女らの収入で，周辺の農村集落よりむしろ裕福でさえあった．このことは，小説家坂口安吾の次の文章からもよくわかる．

> 百姓ではどうしても生活がたたないために，村の女が毒消しという行商に出るようになった．この事情は今日でも同じである．米のない貧乏村．．．．（中略）．．．．貧乏たらしいボロ小屋やまずしそうな農家などは見当らない．半数は農家という構えですらない．邸宅というべきだ．それらは門構えをもち，土蔵や倉をもち，石組の塀をめぐらし，庄屋の屋敷かと思うのが無尽蔵に次から次へと現れ出てくるのである．
>
> （角田村について）

私もかなり日本の諸国を旅行した．しかしどれほど気候のよい南国に於ても，この北国の毒消し部落ほど裕福らしい農家がそろっているところは見たことがなかった．時は雪国の真冬であるというのに，私がこの部落でひしひしと感じたものは南国の情緒である．．．．（中略）．．．．このおびただしい邸宅がまだなかった昔，砂丘の畑があるだけだった昔はたしかに悲しい部落

であったに違いない．そして部落の女は否応なく毒消しの行商に出かけなければならなかったに相違ない．米を食うためにである．事の起こりはそうであったに違いないが，今ではあまりにも違うのである．　（角海浜について）

（坂口安吾(1955)，河出文庫版『安吾新日本風土記』(1988)，p.66～71より引用）

こうしたことを見てくると毒消し売りの女性たちは，1953(昭和28)年ころ楠トシエが歌った「毒消しいらんかね」の歌詞にあるような，越後の寒村から一家を養うために若い娘が都会に出て，遠く故郷を思いながら毎日苦しい行商を続けている，というものとは少し違っているように感じられる．行商の娘たちは，そのような都会の人々の固定観念とは関係なく販路拡張に努め，着実に収益を上げていた，というのが事実のようである．

この毒消し売りの行商は，第二次大戦中は経済統制の影響を受けながらも存続したが，戦後の相次ぐ薬事法の改正（1948[昭和23]年と1960[昭和35]年）で訪問販売が原則禁止とされ，配置薬しか認められなくなったのを契機に，急速にすたれていった．末期には薬よりも日用・雑貨品の販売の方が主であった．

4　行商人の推移と行商先

角海浜集落の毒消し売り行商人について，その従事者数の推移と行商先を見てみたい．

これらに関する正確なデータは現在ほとんど残されていない．そのため以下ではやむを得ず，書物や新聞記事から記録や体験談などを引用しながら考察することにする．

まず初期の角海浜集落の行商者数は，前出の小村弐(1963,p.19)によると，1885(明治18)年67人，1889(明治22)年53人，1894(明治27)年121人，1897(明治30)年124人と，日清戦争のころから急増した（第1表）．

小村(同,p.20～22)はこのころの行商者の体験談を収録しているので，それから一部を引用する．まず，角田村の大越リイさんは1890(明治23)年，13歳の年に初めて長野県飯山方面へ行商に出た．行商先へは，角田～寺泊～直江津～新井～飯山と徒歩で向かった．翌1891(明治24)年からは，群馬県足利に本拠を定め，そこから周辺町村に1カ月分の売薬を背負って行商に出た．行商先までは三国峠を歩いて越え，売薬は長岡までは信濃川の舟を，その先は汽車を利用して送った．また，同村の山川カノさんは，15歳になった1901(明治34)年から，柏崎から汽車に乗って埼玉県へ行商に出た．帰りは一刻も早くと，三国峠を通らず険峻な清水峠を選ぶことがあった．

第1表　角海浜の1戸当りの行商従事者数

人数	1894（明治27）	1897（明治30）
0 人	34 戸	34 戸
1	50	47
2	22	25
3	6	6
4	1	1
5	1	1
計	114	114

出典：小村弐(1963，p.19)

これら2人の体験談を見ると，明治20～30年代初めのころは，行商先へは遠隔地でも徒歩で往復していたこと，そしてその場合，関東方面へはこのころ開通した鉄道の経路とは違い，距離の短い上越国境ルートが選ばれていたことがわかる．また，この当時はまだ東京が行商地として登場しない．

東京で毒消し薬の行商が始められたのは，1901(明治34)年以降らしい．前出の大越リイさんの事例を，小村(同,p.25～27)から続けて引用する．大越さんはこのころから，他の行商者と2人で東京市場の開拓を始めた．彼女らは1～2銭の小袋を作り，まず芸妓置屋，米屋，酒屋，魚屋，風呂屋などの越後人が商売をしている店に無料で置いて回った．そして2～3年間苦労した後，売子を連れて下谷区入谷で合宿するまでになった．東京の得意先が安定してからは，毎年7～8人から15～16人の売子を連れて行くようになり，行商先も次第に横浜，横須賀，浦安，中山（市川市）方面に広がった．

1905(明治38)年の「新潟新聞」4月5日付の記事は，「近郷一体の老若婦人之が行商を為すを其義務と為し毎年五月十日を以て出発するの例にして行商人六百人以上あり信州，上州地方を始め東海道筋より奥羽地方まで夫々行商し....」とある．また1912(明治45)年5月13日付の同紙では，「西蒲原郡角田村地方の売薬行商者婦女子九百五十人

は....三條驛にては同業者の為め特別輸送を開始し....」と行商人の出発を報じている．明治末のころから行商人が急増し，出発には鉄道が利用されるようになり，次第に大々的になってきたことがわかる．

このころの交通事情をみると，1899(明治32)年に新潟と関東地方を結ぶ鉄道（現在の信越線）が全通し，1905(明治38)年には初めて上野～新潟間に直通旅客列車が登場している．上の記事にある1,000人近い行商者は，村から20kmほどの道を歩いて三条市へ出て，この鉄道を利用したわけである．さらに，1912(明治45)年8月には越後鉄道(現在の越後線）が開通し，行商人たちは最寄りの巻駅から鉄道を利用できるようになった．

さて，鉄道の利用が可能になった大正期には，行商人の数はさらに増加する．1919(大正8)年10月16日付の「新潟毎日新聞」によれば，「西蒲原郡浦濱，角田を根拠とし....毒消丸行商に往く者は皆女子にして約千五百人あり」とある．数字を単純に比較するのには無理があるが，明治末からこのころが，行商人の急増期のようである．同年5月5日付の同紙には，前年の行商人1人あたり平均収入は150～160円にも上り，村の経済を維持するものになっていた，という記事も見られる．

当時の行商先の分布を知る手がかりになるのは，1923(大正12)年9月8日付の関東大震災に関する「新潟毎日新聞」の記事である．それには，「西蒲原郡角田村では東京横濱横須賀及び茨城，栃木，埼玉，東京府下などへ毒消賣女行商人及び大工其他出稼ぎ人及び寄留者二千余名に及んでいるが六日までに生還せるもの僅か十五六人に過ぎず其他悉く行衛不明である，村民の不安憂慮甚だしく惨禍発生以来連日村中休業し之が救済に狂奔してゐるが愈帰郷の見込ないので一村こぞって救護隊を組織し東京及び横濱方面へ捜索救護に急行した」とある．これから，当時の毒消しの行商人は大工の出稼ぎ者とともに，東京・横浜などの地震被災地域に多数展開していたことが推測される．

なお，この関東大震災に行商先で遭遇した人々はその後続々と巻駅へ帰還し，駅構内に臨時に設けられた浦濱村や角田村の出張所で村長以下の救護を受けたと，9月10日付の「新潟毎日新聞」にある．上の記事と合わせ，当時の毒消し売りの行商がいかに村の重要産業であったかを示している．

1924(大正13)年5月29日～6月1日の「新潟毎日新聞」の連載記事によれば，「....販路區域は普通考へると賣薬は醫者の行き届かない閑村僻地が顧客かと云ふに決してさうでなく東京，横濱が最も毒消丸の大顧客で行商人の四分の一即ち五百人は此両地に貸家を借りて自炊し賣り歩くので....」とある．この当時の行商先が東京・横浜などの都市部を中心としていたことが，ここからもわかる．

ところで，1925(大正14)年の国勢調査によれば，女性人口は浦濱村で433人，角田村で1,333人である．1928(昭和3)年10月18日付の「新潟新聞」は，同年の調査によると毒消し売りの総数は1,125人で，そのうち浦濱村が230人，角田村が700人を占めていると報じている．つまり，両集落の半数以上の女性が行商に出ていることになる．報じられた年齢別の行商人の数は第2表のとおりで，15～20歳が最も多い．ちなみに，このころ彼女らが故郷に持ち帰る収益金は，同記事によれば合計245,760円におよんだという(同年の別の記事では総数2,000人で年額50万円とされており，どちらが正確な数字か不明である)．

昭和初期は，大正期に引き続いて毒消し売りの行商が順調に推移した時期であった．佐藤元重(1959,p.70)によれば，1930(昭和5)年の行商人の数は第3表のようであった．当時の行商のしかたについて，新潟日報社（1977,p.234）が経験者の詳細な体験談を記録しているので，以下に興味深い箇所を抜粋する．

角田村の毒消し売りの一人，笛木みえさんは1925(大正14)年，15歳の夏にはじめて越後線の巻

第2表　新潟県西蒲原郡の毒消し売り行商人年齢構成(1928(昭和3)年)

年　齢	行商者数（人）
～14	68
15～19	370
20～24	227
25～29	118
30～34	115
35～39	80
40～44	53
45～49	40
50～59	39
60～	15
計	1,125

出典：「新潟新聞」1928(昭和3)年10月18日付

駅から汽車で東京へ向った．東京では最初，下谷区鶯谷駅近くの借家で，親方（姉）と他の弟子とともに共同生活を送る．毎朝6時に売薬と5銭をもたされて宿舎を出て，まず浅草の観音にお参りしてから，全区間3銭の市電を利用して東京の下町，現在の台東・墨田・荒川区あたりの家を一軒一軒訪問販売した．薬は中身の量により1袋10銭～1円で，1日12時間以上歩き回って3～5円になった．苦労はしたが，郷里にいて野良仕事を手伝わされるよりは楽しく，10月初めに帰郷するまでに，100～150円もの収入になった（当時は米1俵約5円）．

販売した薬は，角田村や浦濱村などで製造した「毒消丸」（腹痛・食当りの薬で嚥下物を吐き出させる効果があるとされる）をはじめ，「金証丸」（胃腸薬），「赤玉」（腹くだしの薬）「セメンエン」（虫くだしの薬），「六神丸」（強心剤）などで，当時の家庭の常備薬とされていた．

毒消し売りの出発は4月28日，帰郷は村祭りに間に合わせて10月2日と，組合で取り決めていた．帰郷の日には巻駅前は出迎えの家族でごった返し，みやげ物屋や飲食店までずらりと店を出して，お祭り騒ぎだった．

5年間の弟子の経験の後，笛木さんは毒消し売りの親方になる．浅草の国際劇場の近くに借家して，弟子とともに現在の台東・墨田・足立・荒川・北区にあたる東京下町から，埼玉・千葉などの一般家庭を回った．お得意は200軒近くにもなった．自分の他には当時，会社や役所，工場などを回る人，東京駅や上野駅を縄張りにして商売をする人もあった．

ところで，上の話の中にある「組合」とは，1921（大正10）年ころに設立された西蒲原郡売薬行商人組合のことである．これについては，1936（昭和11）年5月10日から「新潟毎日新聞」に8回連載された「越後名物毒消し賣り座談会」という記事で，角田村の関口亀蔵村長が次のように紹介している．

各村の行商人はこの組合に属し，その中から支部長が選ばれる．支部長は営業者（製造者）の組合と売薬交付日，行商出発日，納入価格などを交渉して協定を結ぶ．これは，特定の者が他人より早く出発したり薬を多く仕入れたりするのを防ぐためである．この協定によって各村の売薬交付の順番が決められ，行商の出発日が一本化される．

第3表　新潟県西蒲原郡の毒消し売り行商人数（1930（昭和5）年）

	親方数	弟子数
角田浜	321	545
五ケ浜	85	127
越前浜	132	224
角海浜	38	105
四ツ郷屋	25	50
巻その他	96	190
計	694	1,241

出典：佐藤元重（1959，p.70）

各行商人は薬を代金後払いで仕入れ，行商先では現金で販売する．この販売方法が富山の配置薬と違うところである．日々の売上金は出先の郵便局や銀行に預金し，帰郷の時に地元へ振替で送金する．帰郷後に製薬業者との清算を，組合の協定した日に各村ごとに行う．

この昭和初期のころの毒消し売りの東京での生活を，辺見じゅん（1978）が随筆の中で紹介している．それによれば，このころ入谷には800人余の越後の女衆がいた．旧金杉上町のある借家は，満州事変の年（1931（昭和6）年）の不景気のころから家賃40円のところを20円で行商人に貸している．家の間取りは1階と2階がそれぞれ6畳と4.5畳で，そこに5組の毒消し売り，合計25人が同居した．彼女らはよく働いたそうで，越後の人間が帰ったあとは，草木も生えないと言われた．

戦時色の強まった1940（昭和15）年5月8日付「新潟毎日新聞」の記事は，「毒消部隊いよいよ出発――繰り出す二千六百の娘子軍」という勇ましい見出しを付け，その中で行商先を紹介している．それによると「東京市700，横浜市200，残りの1500は長野，群馬，茨城，山梨，東京府下，千葉，福島，宮城，岩手，山形，秋田，北海道，樺太各地に分散行商」となっており，東京・横浜といった大都市が市場として定着していたことがわかる．

敗戦を経て，毒消し売りの行商人を取り巻く環境は大きく変化する．1948（昭和23）年12月以降，薬事法の実施により薬の現金取引行商が禁止され，当時の角田方面の行商人1,800人あまりが「置

き薬」を余儀なくされた．それまで腕の良い行商人は1カ月10万円の貯金をするほどの収益を上げていたが，「置き薬」を始めるための資本や配給台帳の記載に関する不安から，転業を考える行商人が出ていく（「新潟日報」1948(昭和23)年9月4日付の記事による）．

この薬事法が実施された翌1949(昭和24)年，浦濱村では，「昔なつかしい毒消し賣りという名が家庭薬配置員といかめしくなり，証明書（鑑札）の交付は二百余に上ったが実際の出動者は百人くらいで，最近は長期の賣り歩きはなくなり，一と月から三カ月までが一番多い，ところがこうした出稼者は貧乏の村を嫌ってか他郷に定着してしまう者が年々殖えてきて，本籍人口千五，六百人中すでに約五百人が村を離れて世帯をもっている」（「新潟日報」1949(昭和24)年9月2日付），という状態になった．

そして，角海浜集落は「昔は毒消しの本場だけに百数十人も薬売りに出かけたというが今ではわずか十一人，それも五十歳以上の年取った人が多い，大ていの家では年寄り夫婦が孫のお守りをしながら畑仕事くらいをやっており，倅夫婦は出稼ぎ先の他国に落ちついて仕送りをしている」（「新潟日報」1951(昭和26)年11月10日付），というような過疎の村に転落した．

5　おわりに

毒消し売りの行商人に対する旧来の都会でのイメージは，前述のように，越後の寒村から一家を養うために若い娘が都会に出て故郷を思いながら健気に行商をしている，というものだったようである．紺かすりの着物に前垂れ，菅笠をかぶりワラジを履き，紺の風呂敷包みをかついだ変わらぬ姿は，信用を保つための彼女らのユニフォームであったが，昭和初期のモダンばやりの都会の人の目には奇異に映ったに違いない．

この点は富山の薬売りとは対照的である．近世初期から藩の保護を受けて発展した富山の配置薬業は，消費者からも，越後の毒消し売りとは比べものにならないほど，高度に組織化されたシステムと認識されていただろう．

しかし毒消し売りの実態を量的な面から見ると，1899(明治32)年の東京～新潟間の鉄道開通のころから行商人の増加期を迎え，出発には専用列車をしたてるほどになり，角海浜からは集落の全女性の半数以上がこれに従事するほどの一大産業になっていた．また，1904～05(明治37～38)年の日露戦争のころからは，東京という大きな市場を得て，行商人のもたらす収益が村の経済を左右するほどになった．

また組織について見ると，後継者の育成や販売のシステムが確立していたことが注目される．つまり，親方と数人の弟子からなる集団が半年間，行商先の毎年決まった借家で共同生活を営み，弟子はそこで仕事を教え込まれて数年後に自分の顧客を増やして独立する．独立した行商人は各村ごとに売薬行商人組合を組織し，製造業者から商品を代金後払いで仕入れる．商品は全量を出発時に持参するのではなく，行商先で必要になった量をその都度製造元から鉄道便で取り寄せ，その決済を帰郷後の決められた日に組合ごとに行う．こうした，行商人の再生産の仕組みと，少資本での開業を可能にする合理的な取引の仕組みが，出来上がっていた．

こうしてみると毒消し売り行商は，全体規模の点では富山の薬売りとは比較にならないほど小さいが，大正～昭和初期の全盛期にはひとつの産業組織として確立していたことがわかる．そして，角海浜・角田浜などから毎年2,000人もの女性が，一年の半分を故郷を離れて生活するようになると，行商先の土地との間に特別の関係が生まれてきただろう．つまり，冒頭で述べたような意味での地域間関係が，ここには見られるのである．

なお，この毒消し売りの発祥の地である角海浜集落は，前述のように1969(昭和44)年に全域が東北電力の原子力発電所用地とされ，全戸が移転して1974(昭和49)年，ついに廃村となった．しかし，建設計画は実行に移されないまま，現在まで15年が経過している．

（新潟大学・教養部）

謝辞　本稿の作成にあたり，㈱吉田製薬星野社長，巻町郷土資料館石川館長，新潟県立巻保健所山本次長，地元巻町の斎藤文夫様をはじめ，多くの方にお世話になりました．御礼を申し上げます．

文　献

石川与五栄門(1988):越後の毒消し丸－行商がささえる製薬業．加藤秀俊編『ふるさとの人と知恵－江戸

時代人づくり風土記 15新潟』農山漁村文化協会，147-154.
小村　弐(1963):『越後の毒消し』巻町役場（巻町双書第8集），85ページ.
櫛谷圭司(1988):低湿地農民の稲作の時空間－土地改良前の信濃川下流部（亀田郷）を例に．中村和郎編『日本における生活空間組織と環境観の変遷』（昭和62年度科学研究費補助金　総合研究A　研究成果報告書），65-81.
坂口安吾(1955):安吾・新日本風土記－富山の薬と越後の毒消し．『中央公論』1955年3月号，153-169（1989年3月号，464-477に再録）.
佐藤元重(1959):越後の「毒消し売り」．『北陸－風土記経済史』弘文堂，58-71.
新潟日報社(1977):『県民聞き書き帳』新潟日報事業社，266ページ.
辺見じゅん(1978):毒消し売りの道．華道誌淡交，No.374（第32巻3号）．淡交社，152-163.
巻町(1988):『巻町史　資料編4（近・現代Ⅰ）』880ページ.
巻町・潟東村教育委員会(1974):『角海浜総合調査報告書－角海浜1974』200ページ.